

# 益田鈍翁の蒐集眼―近代茶会記録を中心に―

大澤 一輝

## 修士論文目次

### 序章 先行研究の整理と研究目的

#### 第一章 数寄者たちの登場と客寄せ茶会について

##### 第一節 数寄者と茶会の関連について

##### 第二節 大師会と鈍翁について

##### 第三節 鈍翁の略歴について

#### 第二章 鈍翁に関わる茶会記録について

##### 第一節 大師会に関した記録について

##### 第二節 歴代茶人を意識した茶会について

##### 第三節 美術品を中心とした茶会について

#### 第三章 鈍翁の審美意識について

##### 第一節 「佐竹本三十六歌仙絵巻」について

##### 第二節 蒐集品の過程と変化について

## 結論

## 参考文献

### 序章 先行研究の整理と研究目的

本研究は、近代日本の茶会記録から、美術品に関連する記述を中心に抽出し、近代日本を代表した数寄者である益田鈍翁（本名孝、一八四八―一九三六）を軸に、数寄者たちの文化的な側面性について考察した内容である。本件の焦点である鈍翁に到っては、各旧家より秘蔵の美術品を売却し、新たに表具し、掛軸として茶会に用いた。表具裂もまた「鈍翁好み」によって独自の色が現れている。本件の研究は、鈍翁により蒐集された掛軸を中心に、表具構成における考察から素養の背景を捉えることを目的とする。それにより、鈍翁における新たな一面性や評価が浮かびあがるといっても過言ではないと考えている。

#### 第一章 数寄者たちの登場と茶会記録との関連

近代数寄者たちの派生の背景と茶会の関係性について考察した。当時の美術品の状況として、高橋箒庵著『近世道具移動史』の文献中、明治維新以降の社会構造の変化が、各旧家を圧迫し秘蔵の美術品を売り立てたことよって拍車をかけたことが記述されている。それと対照的に新興の実業人らは富を得て多くの秘蔵品を落札していく。この当時の数寄者らを年代ごとに四つの世代に分類し、明治の実業人たちの研究をおこなった熊倉功夫氏の文献より近代数寄者、時代背景、茶会の視点から関連性について言及した。

#### 第二章 鈍翁に関わる茶会について

茶会の勢力は大正期を経て鈍翁を筆頭とした数寄者たちの時代へと移り変わる。中でも中心人物として鈍翁は従来の伝統的な茶会に拘らない新たな茶会へと展開させたことは茶会記録からみても確認できる。「客寄席」を軸とした茶会が鈍翁の茶会の特徴である。この鈍翁が主催した茶会を三つの種類に分類した。当時の茶会の詳細が分かる資料元として、高橋箒庵の茶会記録を中心に抽

出した。

大師会に關した記録について

明治二八年（一八九五）に弘法大師筆「崔子玉座右銘」を譲り受けその喜びと他の数寄者らに披露する目的で翌年二十九年三月に、第一回の大師会を品川御殿山の自邸で開催した。この茶会は従来の形式とは異なり大勢の参列客を招く「客寄せ」の要素がある。鈍翁による『風流記事』からもその規模が大ききことが示されている。またこの茶会以降は毎年開催され、座右銘のほか、「源氏物語絵巻」や「佐竹本三十六歌仙絵巻」のような絵巻類を披露することで、当時の美術品の概念をも変えたといえる。また絵断簡のような仏教美術も同時に茶道具として活用したことも鈍翁による独自の意識である。

歴代茶人を意識した茶会について

弘法大師を筆頭に鈍翁の歴代の茶人たちを敬う意識として小堀遠州を供養兼ねて開催した「遠州会」もまた鈍翁を代表する茶会の一つである。昭和十二年（一九三七）に開催された遠州蔵帳品茶会はその遠州好みの茶道具が一同に集まった茶会であるが、それ以前より鈍翁は「遠州会」を通じて遠州好みの茶道具を蒐集して披露している記録から茶の湯の基礎的な知識を歴代の茶人たちの文献で学んだうえで、新進的な趣向を用いた茶会を開催していることが結びつく。美術品を主眼とした茶会について

鈍翁の蒐集品の中でも「座右銘」と並び象徴される「佐竹本三十六歌仙絵巻」、「石山切（貫之集下）」の美術品を主役とした茶会記録からは、美術品を茶道具に用いており、本件も美術品についての箇所を抽出した。

第三章 鈍翁の審美意識について

前章の茶会記録から鈍翁の蒐集品に關連する記録を抽出した。その中の佐竹本三十六歌仙絵巻の断簡である「斎宮女御」の表具考察から、鈍翁好みに仕立てられた表具裂の考察及び他の断簡との比較を通じて鈍翁が斎宮女御に対する

素養について言及した。また鈍翁による他の蒐集品における表具考察をも比較したうえで、鈍翁における蒐集眼の過程について言及した。

結論

鈍翁の蒐集眼について茶会記録の視点から考察してきた。従来の見解通り近代数寄者として、最大の蒐集家であることは疑いない。本件はそれ以上に単純に美術品を蒐集するに留まるだけでなく、欧米文化の波に押されて日本古来の文化は軽んじられ、古美術品は滔々として安価に海外へ流出していた。鈍翁は時流に抗し、国家に代って公共のために私財を投じて古美術を買い集め守った姿勢があつたのである。そうして蒐集した美術品の活用に茶会を持ち合わせたと考える。自身が主催した茶会に茶道具として出展された多くの絵巻や掛軸などはその例である。こうした茶会と切り離せない関係性を築いたことは新たに浮かんだ鈍翁の観点である。また鈍翁は、田中親美に対して平家納経、三十六人家集の複写など援助をして制作させた。邸内にも優秀な職人を住まわせて陶器、蒔絵などの名品を写させた他、各地の腕利きの職人に花籠・釜などを作らせ各数寄者たちに贈ったことも鈍翁が率先して行った独特な趣向である。本稿の焦点である鈍翁の蒐集眼が卓越していたのは、単純に評価の定まった名品のみを集めただけでなく、時として人が見逃すような小品でも、古美術商人が重視しない物も美術品としてすぐれている限り、自らの審美眼によって選び蒐集した。この鈍翁の古美術蒐集の意識が集約された結果として「大寄せ」の手法を用いた茶会が大師会である。ここまで到った境地として鈍翁が茶会における格言として「茶は常識」の考えのもと、生活の一部として茶道があつた。茶湯の三昧境に浸っていた背景には単に現実からの離脱や逃避をしていたのではなく、自らの生活を芸術化することによって心を豊かにし、現実処理への活力の一端となっていたのではないだろうか。鈍翁の蒐集眼を紐解くうえでこのような結果に到った。

## 【作品研究 修復】「阪正臣 夏嶺」

《釈文》

夏嶺 御歌所寄人正書 ゆふたちのくものひまよりしたゝるは いかなるみ  
ねのことりなるらん

《法量》

縦二九・三×横四二・三センチ

《解説》

阪正臣（一八五五―一九三二）は宮内省御歌所寄人を努めた歌人であり、宮廷風の仮名をもちいた明治時代から大正時代にかけての宮廷歌人である。本件は、阪正臣懐紙「夏嶺」の掛軸を修復した。昨年度から修復を専攻している経験を活かし行つた。掛軸の特徴として紙を素材とした裂を用いた「紙表具」とする茶掛けである。状態として、長期間巻いた状態のため、巻き癖がつき、全体的に横しわが確認された。また軸を収納する木箱が無い状態で且つ、収蔵された場所の保存状態の影響からか、全体的に砂埃をかぶっており、本紙も黄ばんだ汚れが確認された。さらに各箇所部分的な損傷もあることから洗浄を中心とした修復が必要であった。これらをもとに、まず全体の保存状態を記録して部分ごとに解体し洗浄を行い、その後本紙の損傷部分を同系統の紙で補い、最後に裏打ちを行い軸首、八双の各部品をつけるまでの工程を行つた。修復前の箇所と比べ改善はされたが、増し裏打ちを行つたことで、やや掛軸の厚みが増した。また総裏打ちで裏打ち紙を刷毛で叩く加減が強すぎたため、紙の毛玉が残ってしまった。これらが修復作品における反省材料であり、今後の糧として反映させていきたい。

## 【作品研究 模倣】「阪正臣大短冊（春浦曙）」

《釈文》

浦春曙 みほのうらこのあけほのに打ち霞む 松の色みれははなもおもはず  
正臣

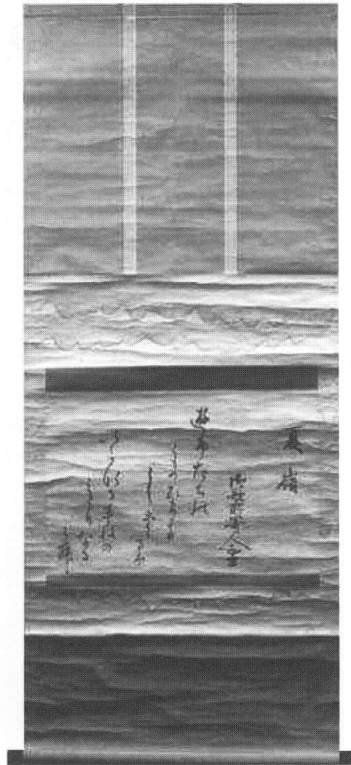
《法量》

縦一五〇・〇×横三五・〇センチ

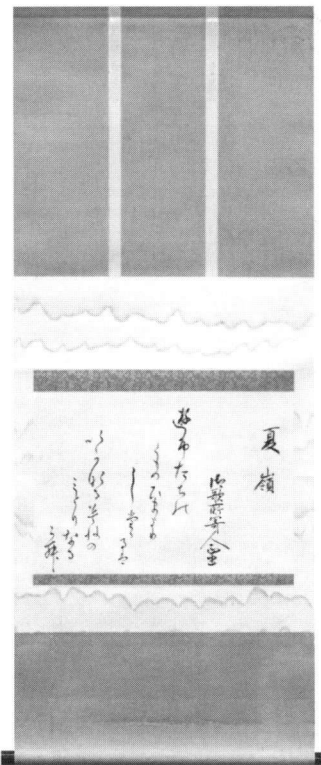
《解説》

阪正臣の大短冊の模写を行つた。阪正臣（一八五五―一九三二）は書を高崎正風に習い本件の書風もその高野切一種を彷彿とさせる穏健な面持ちである。原本は正臣自詠の和歌を二行構成により書いており、内容は但馬御火浦（現兵庫県香住海岸西端）に春の到来を詠んだ歌である。この掛軸の特徴としては、「描表具」の形式を用いている。通常掛軸は本紙と各裂地を継ぎ合わせた構成であるが、本件は「描き表具」を称し一枚の絹本に一文字、中廻し、上下全てを描いた手法で用いられた特殊な表具である。これまで絹本に書くことが乏しく、墨色の変化や筆意では絹本独特の擦れに悩んだ。原本の雰囲気の穏建を意識し制作したが、歌部分の下絵である金銀の箔が細かくまぶせず疎らになった。また裏打ちの際、絹本に描いた色が剥落し全体的に薄くばやけ原本が持つ華麗さに欠けた。模写に取り掛かる以前の下準備や道具の重要性を学び、模写制作の一人者である田中審美の技術の高さを痛感した。しかし展覧会や公募展に特化した俗のある作品よりは、表具の観点から書に繋げ作品として表現できた。今後の書に対する観点も広い視野を広げて自己の制作に反映させていきたい。

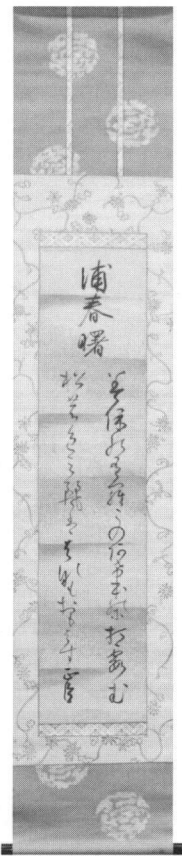
【修復】 阪正臣 夏嶺  
修復前



修復後



【模倣】 阪正臣大短冊 (春浦曙)  
原本



模写

